

非毛沢東化が始まった

北京政変・文革派失墜と 華国鋒党主席就任

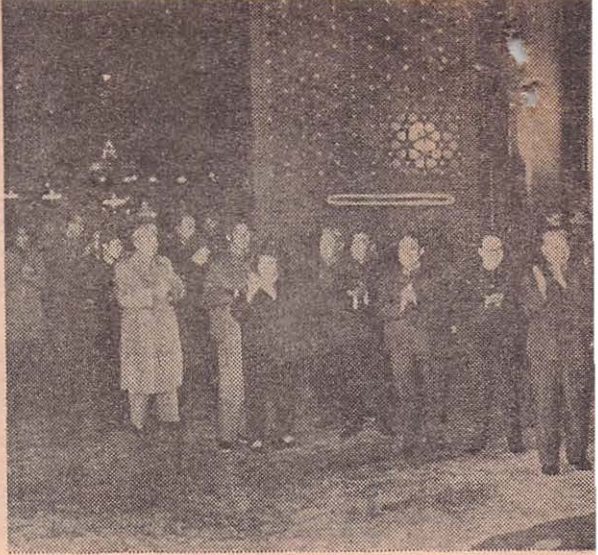
中 嶋 嶺 雄

脆弱だった文革派の政治的基盤

北京の出来事は白昼夢ではなかった。江青夫人をはじめ王洪文、張春橋、姚文元ら文革派首脳、いわゆる上海グループの面々とその配下の幹部たちが、グループ未遂のカドで一網打尽にされたとの報道は、いよいよ真実であるらしい。この衝撃的な報道に接して、私の筆はいま震えている、といったらいたささか大袈裟であろうか。それは予測が当たったとか、はずれたとかいう興奮のためではない。予測という点では、文革派の基盤は、その表層の政治的言語のかまびすしきにもかかわらずきわめて脆弱であ

り、中国社会の基底から浮きあがっていて、彼らの行方に大きな不安があることを述べてきた私の見方が大筋では当たったといえよう。だが、にもかかわらず私の筆が震え、心が騒ぐのは、このような出来事が白昼夢ではなかった、中国政治のあまりにも圧倒的なドラマ性にたいしてであり、同時にその空々しいまでに苛烈な政治的現実をたいしてである。そして一瞬私の心をよぎったのは、皮肉にも、「政権は銃口から生まれる」というあまねく人口に膾炙した毛沢東の名言であり、これでは、もしも状況の推移いかんで

は、文革派がその配下にあったはずの首都工人民兵などを擁して華国鋒らの「新実権派」を捕らえることもあり得たかもしれない、という思いであった。おそらく華国鋒らの「新実権派」は国慶節直後の後継党主席選任問題に直面したこの時期に文革派をこのように一網打尽にしなれば、つまり「政権は銃口から生まれる」という毛沢東の言葉を説いて実行しなければ、みずからの地位と運命が危うかったのかもしれない。さもなくば、いかに中国の権力闘争が激しいものであるにせよ、故毛沢東主席の「喪主」でもある江青夫人らを、一カ月の喪も明けない一〇月七日という時点で（もしも今回の報道が真実だとすれば、逮捕・拘禁するといふ「背徳」を犯し得るであろうか。今回の出来事によって中国では、周恩來の死にたいしては弔辞を読んだ鄧小平が葬儀の司会者、王洪文らにやられ、毛沢東の死にたいしては弔辞を読んだ華国鋒が逆に葬儀の司会者を「喪主」とともにやっってしまったことになる。しかし、その華国鋒は、毛沢東の霊前で「悲しみを力にかえ」ることを誓い、「団結するのであって、分裂してはならない」との毛沢東指示を一語一語かみしめたはずではなかったか。もっとも、この毛沢東指示の後半は「公明正大であって、陰謀術策をめぐらしてはならない」とあるので、江青夫人らが、伝えられるように、毛沢東の指示や遺書の偽造もしくは改竄によって一挙に「宮廷革



文革派が最後に公式行事に登壇した毛主席
追悼座談会。右から華国鋒、王洪文、葉劍
英、張春橋、江青、姚文元、李先念（九月
三〇日・北京天安門樓閣で）#WWP

命”を実現しようと「陰謀術策をめぐらし」たのであれば、今回のような結末も不可避であったとされるのかもしれない。そのような理由づけは、今日のような中国の政治的現実のなかではどのようなにも可能だといわざるを得まい。

今回の出来事が深刻であるのは、たんに文革派首脳の大量失墜によって、文化大革命以来の過去一〇年米の政治的軌跡があるいは帳消しにされるかもしれないことだけでなく、その情報の世界を電撃のように駆けめぐっているさなかに、中国当局のスポークスマンが華国鋒の党主席就任の事実を外国人記者の問いに答

えるというかたちでいかにもせつばつまった状況において確認せざるを得なかったという事柄の具体性においてである。それほどまでに党主席選任問題は政治的緊張と摩擦を解く問題であり、それは、揺れ動いた毛沢東体制下において、党主席のみが党・政・軍を一挙に掌握し得るという集権的な権力構造が中国内部に制度的に形成されてしまっているからにほかならない。

つまり、今日の中国の権力構造におい

“上海グループ”と“黄安グループ”

私は先に、文革派が逆に「新実権派」を捕らえることも状況としては想定され得たのではないかと述べたが、現実には、そのような事態は起こらず、その威勢がそれほど喧伝されなうえに毛沢東継承権をもっとも近い場所において保持していたはずの文革派が随くも一挙にして崩れたのである。つまり、権力中枢における政治的拮抗状況は一日と過熱しつつあったにもかかわらず、文革派は、その政治基盤を十全なものとは成し得なかつたのであり、彼らの崩壊は、この点で、必然的でもあった。周恩来死後の中国内政において、「走資派批判」が起り、鄧小平が失脚し、一見、文革派が勢いを得たかに見えたのであるが、にもかかわらず、一連の事態を注意深くながめていれ

て、「主席」の地位は、それほどまでに決定的なものであり、このような権力のシステムのもとでは、集団指導制などという、いささか上品で近代的な統治の形式はそもそも問題にならないのではなからうか。たとえある種の政治的連携（Political Coalition）が可能であったにしても、今日の中国のリーダーたちはそのような連携を安定化させるに足るような「仲良しクラブ」を形成しているわけでは決してないのである。

ば、文革派の政治的資産は、毛沢東主席の生存という不可侵の現実と、『人民日報』などの宣伝機関、清華大学などの学生層や民兵組織および一部の生産点に限定されたものであり、そのような状況のゆえに、「走資派」の鄧小平は他日を期して「最後まで悔い改めなかった」のであった。そして、四月初旬の天安門事件は、亡き周恩来総理への追慕の念の発露であったのみならず、毛沢東家父長体制下において政治を私物化してきた文革派、とくに江青夫人と文革の旗手・姚文元への批判の大衆的噴出でもあったのであり、この意味で天安門事件はまぎれもない「反文化大革命」なのであった（拙稿「逆流に毛沢東政治への批判——天安門事件の背景——」、本誌一九七六年四月

月一六日号）。しかも、江青夫人を中心とする閥的な上海グループにたいする悪念は、文化大革命以来、当初の「敵」のみか「味方」さえも次々に犠牲羊に供していったという理不尽に増幅されて、広く重く沈殿していた。過去一二年米、中国内部では、「文化大革命のカタをつける」といった言葉が「算賬」（勘定を清算する）という意味）という中国語によって広まっていたことの含意をいささかも無視できないであろう。こうした状況のなかで、毛沢東の死は、まさに「解き放たれた死」なのであった。

右のような政治的・社会的現実のなかで、そもそも政治的妥協の結果浮上した華国鋒は、次第に自己の政治的地盤を固めるとともに、いちはやく、文革派から離反しはじめたのであり、いわゆる「新実権派」の立場を固めつつあったように思われる。思えば、華国鋒は、文化大革命期に活躍して毛沢東、劉少奇が「兩人の故郷である湖南省で競ったとき、実権派打倒に大きな力があつた」とはいえ、いわゆる文革派のなかでは上海グループではなかつたのである。この点では、文化大革命に最大限の貢献をなした非上海グループ文革派の陳伯達や林彪がやがて上海グループからはじき出されたのと同様、上海グループとはそもそも一線を画さるべき立場にあつたといえよう。今回の出来事に際して、長く毛沢東の身辺警護の責任者であり、中国の特務関係の重鎮、汪東興政治局委員（党中央



故毛主席のヒツギの前で党・政府指導者が
團結を誓ってから一月もたないうちに
権力闘争が爆発した（九月一七日・北京人
民大会堂で） 〓 WWP

弁公庁主任）がもしも逮捕者のなかに含まれていないとすれば、彼も文革派とはいえ上海グループではなかったのだから。

こうした政治的文脈のなかで、李先念副総理や葉劍英党副主席らの実務派長老や軍首脳は、北京軍区司令の陳錫聯、広州軍区司令の許世友、瀋陽軍区司令の李德生ら、党中央政治局委員でもある実力派軍人で李先念とともにいずれも湖北

省黄安県出身の「黄安グループ」とともに、華国鋒らの「新実権派」を支持したのであり、私はこのような前提のもとで分析を試みた際に、「こうした状況のなかで、いわゆる文革派がひたすら毛沢東継承権を主張しつづけたら、中国内政の不協和音は一挙に増幅するであろう」と述べたばかりであった（拙稿「毛沢東体制は解体する」、本誌一九七六年九月二四日号）。

毛沢東批判へ発展する可能性も

そのとき私は同時に中国の将来における非毛沢東化の可能性についても言及し、昨夏の杭州事件や天安門事件が示した中国社会の動向からして、すでに中国内部には、インテリ、熟練労働者、テクノクラート、ビュロクラートを中心に周恩来路線とも思われる「四つの現代化（農業、工業、国防、科学技術の現代化）」を求める潮流が毛沢東体制への「拒否権集団」として内部的に成熟しつつあることに触れた。非毛沢東化を一つの歴史的蓋然性として指摘したのである。そして今回の出来事にたいし、中国社会内部には、文革派の失墜をひそかに歓迎する潮流は大きくても、文革派を擁して華国鋒体制への「左」からの巻き返しを試みるエネルギーはもはや広範には存在していないと思われるだけに、事態

はいよいよ非毛沢東化の明示的な開幕を告げつつあるのではなからうか。このことは、たんに鄧小平ら「走資派」復権の可能性のみならず、劉少奇らの名譽回復をも含む政治的な総決算へと進む可能性を排除するものではないような気もする。当面は、まさに「毛沢東思想をかかげて毛沢東路線に反対する」ことにならざるを得ないであろうが、中国社会の内部的な成熟には、あたかもスターリン死後のソ連社会を思わせるものがあり、この点からしても非毛沢東化はやがて毛沢東批判へとすすみゆくかもしれない。文革派が打倒されて文化大革命が正しく、毛沢東側近が一掃打尽にされて毛沢東が正しいという深刻な矛盾が将来的に是正されないはずがあるであろうか。

約束した人民民主主義体制と漸進的な社会主義改造の政治構想を放棄した一九五〇年代後半以来（この時点で毛沢東政治の決定的な旋回は一九五七年六月の「百花齊放・百家争鳴」運動から反右派闘争への急転換にあった）、中国革命の果実を空しくするほどの大きな転回を経ってきた。この過程を貫いた認識こそ「社会主義社会での階級闘争」のテーゼにほかならなかったが、このテーゼによって葬られた彭德懐、劉少奇あるいは鄧小平らは「ブルジョア分子」、「階級の敵」であったのかどうか。陳伯達や林彪は毛沢東政治の悲惨な犠牲者ではなかったか。林彪與交の真相はなんであったのか。中国革命のすべての功績が毛沢東ひとりに専有されてよいものであろうか。これらの問題を含めて、毛沢東路線、毛沢東政治そして毛沢東自身が「算賬」され、中国革命史のなかに正しくも相対化される日がやがて来るのかもしれない。その意味では、今回の衝撃的な出来事は、中国社会主義「正常化」への象徴的な第一歩であるといえよう。

ただ、事態があまりにも深刻であり、波及するところが大きいだけに、中国の将来と華国鋒体制はまだまだ流動的だと見なければなるまい。同時に、今回の出来事の真相について、なお一点の留保をつけたい気持ちでさえある、というのが私のいつわらざる実感である。

（なかじま みねお・東京外国語大学助教授）

表紙のこぼ



uni mu ni

甲斐良夫

虹がある日、地表でジャンプらしき動作をしたのを私は知っている。想像以上の噴火口の驚きを、その主の日々の息の屈辱を忘れたのかは知らん。脂汗をたっぷりと含んだ肌は、ちょうど、太陽のカクテル光線の反映に幾重もの虹を見たようだ。確か、その愛らしい唇をはげしく震わせた主の、言葉は私は聴いた。それは歓喜のしぐさだったのか、虐待への抵抗なのか。それとも国を憂えての嘆きかはしらない。その音色はすきとおるような可視光線の中をヌルヌルとしていた。すぐさま私は小さな声で、主に囁いた。「uni mu ni」と。生きている者の悩みは似たようなジレンマかも……。抽象の中の具象を、これからも求め続けることでしょう。(F100号)

かい よしお 1944年大分県生まれ 66年京都で坪井一男氏に師事 74年 75年京都洋画版新人展入選 75年より行動展出品 74年以降グループDORO展 2人展2回



編集委員 田代博太郎・倉田文作・鈴木敬・西川新次・町田甲一・毛利久 A3変型判上製函入/原色56頁/グラビア108頁/解説史料90頁 各巻二五、〇〇〇円・二八、〇〇〇円

大和古寺大観 全七巻

〈内容見本進呈〉

- 第一回 室生寺 発売
- 第二回 法輪寺/中宮寺 第二巻 当麻寺 第三巻 元興寺/元興寺極楽坊/十輪院/大安寺/般若寺 第四巻 新薬師寺/白毫寺/円成寺 第五巻 秋篠寺/法華寺/海竜王寺/不退寺 第六巻 室生寺 第七巻 浄瑠璃寺/海住山寺/岩船寺

予約募集 申込締切 11月5日

編集後記

▼三木内閣の支持率が三二%（『毎日新聞』、三五%）（『朝日新聞』）と安定さを取り戻し、ロッキード事件解明への姿勢が評価されたこと、各野党幹部は世論調査の結果にガツクリ、と伝えられています。当然のことではないでしょうか、と指摘してきた読者もあります。

▼最近の地方選挙などで、保守が勝つたびに、ロッキード事件が国民に十分浸透していないとかなば嘆くかのような記事によく出会います。しかし、有権者の頭の中には、事件にだれが、どの党がかかわり合ったかということ以上に、疑獄の解明にだれが真剣に立ち向かってゆくか、に関心を寄せていたと考えられます。そして、国民は野党より三木首相を評価していることがわかります。首相もこの政治状況を十分汲み取ってほしいと思います。

▼ロッキード評論をめぐって、私は自民党の橋本登美三郎元幹事長や推名副総裁から告訴され、これについて読者や友人たちからよく質問を受けます。事柄は言論の自由にかかわっていると思いますが、今週号では推名氏の告訴について経過資料を掲載し検討を試みました。読者のみなさんのご意見をお待ちしています。

▼一日、パンコクから帰国した神戸亮二氏になまなましいタイの軍事クーデターを伝えてもらいました。二日には英紙情報として、中国の政変が大きき報道されました。毛沢東主席なきあと中国の体制について、先に論評していただいた中嶋嶺雄氏に急遽執筆を依頼しました。ヨーロッパの情勢の特色を「不安定」と滝田英氏はとらえましたが、アジアは激動の季節にはいったのでしょうか。(植)

岩波書店



東京・千代田一ツ橋/振替(東京)6-26240